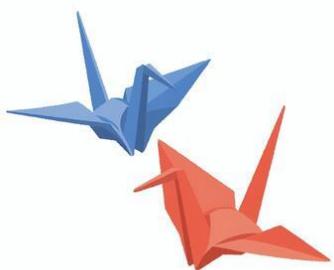


平和について

～戦争体験から学ぶ～



【目次】

○戦争と平和について (纏坂 鈴香)	・・・ 1
○戦争体験を後世に伝えよう (中田 好子)	・・・ 5

○戦争と平和について

縹坂 鈴香

皆さん、そっと目を閉じて想像しながら聞いてください。

幾千の人の手足がふきとび
腸（はら）わたが流れ出て
人の体にうじ虫がわいた
息ある者は肉親をさがしもとめて
死がいをつけ そして焼いた
人間を焼く煙が立ちのぼり
罪なき人の血が流れて浦上川を赤くそめた
ケロイドだけを残して やっと戦争が終わった
だけど・・・
父も母も もういない
兄も妹ももどってはこない
人は忘れやすく弱いものだから
あやまちをくり返す
だけど・・・
このことだけは忘れてはならない
このことだけはくり返してはならない
どんなことがあっても・・・



この詩は、1945年8月9日午前11時02分 17歳の時に原子爆弾により、家族を失い、自らも大怪我を負った女性の詩です。（目を開けてください。）

私は戦後生まれで戦争を知りません。どんなに恐ろしかったか、どんなにひもじか

ったのか、どんなに辛かったのか、何一つわかりません。でも、長崎県出身の私は、幼い頃から、被爆者や被爆の後に降り注いだ放射能物質を浴びた人々が、白血病や癌などの原爆症に苦しめられ、また重度の火傷を負った人々は皮膚がケロイドとなり、長い間、肉体的にも精神的にも深い傷跡となり、被爆者への偏見や差別があったことを聞いたり、見たりしてきました。

そのお話をします。

当時、看護婦（現在は看護師）をしていた私の叔母は、被爆した人々の看護にと徵集されて行き、地獄のような光景に呆然と立ち竦んだそうです。火傷を負った人々の姿は、顔は黒く焼けただれ、腫れあがり、皮膚は溶けてだらりと垂れ下がって、まるでお化けの様で見るも悲惨な姿だったそうです。治療に来た人や運び込まれた人々は行き先もなく、教室が入院室。ムシロ（わらで編んだ敷物）や毛布を敷き詰められた所に休ませ、男も女も子供もみな一緒。

被爆した人々の耳の穴や鼻からは、うじ虫がボロボロ出てくる。治療は空き缶とピンセットを持って、患者の焼けただれた皮膚についているうじ虫取りから始め、そつととるとなかなか取れず、乱暴にピンセットで引っ張ると「痛い」と泣き声とも、ため息ともつかない声が聞こえてきたそうです。1日100匹以上も取っていたとのこと。取っても取ってもチンク油（火傷の時に塗る白いドロリとした薬）を塗って、ガーゼ1枚当てるだけなので、その上に、何処からか金バエが飛んで来て卵を産み付けていく。その繰り返しだったそうです。

患者食は「にぎり飯」。手も顔も焼けただれ、言葉も言えない人でも「おにぎりよ」と言うと口を開けたそうです。その口の中で白い物がモゾモゾと動いている。何だと思います？それは、うじ虫だったそうです。もう体中がゾッとして吐き気がしたそうです。歯ぐきからは出血、髪をとかすと一度にガバッと毛が抜け落ち、眉毛も抜け、

紫斑点（内出血のため皮膚に現れた紫色の斑点）は出る。それは、生きているのが大変な状態だったそうです。このような大勢の患者の中で、我が子をしっかりと抱きしめ、眠ったままの姿で死んでいる母親のお乳にむしゃぶりつく乳飲み子を目の当たりにし、涙が止まらなかつたそうです。

夜になると、校庭の隅で赤々と燃える炎が見える。「一体何の炎だろう。何を燃やしているのだろう。」と考える間もなくすぐわかつたそうです。何だと思いますか？死体であることに目頭が熱くなつたそうです。

毎日、赤々と燃える炎を見ながらの看護。「死んだ者が苦しかつたか、生きている者が苦しいのか、この時からみんなの苦しみが始まつたんだよ。」と言つていました。

看護していた叔母も貧血と出血で苦しんでいました。

月日が経ち、私は14歳になりました。中学2年生の時です。40代の女性の素敵な国語の先生は、真夏の暑い時でも、いつも長袖、タートルネック、長ズボンとすっぽりと体を包む服装でした。ある日、先生に尋ねました。「先生、こげん暑かとに、なんぞげな格好ばしとつ？もっと涼しか格好ばすればよかとに・・・。」と。すると先生は「人に触れられたくないこともたくさんあるのよ。でも、よく見なさい、悲惨な原爆の爪痕を」と悲しい目をされて、ケロイドになった首から腕を見てくださいました。背中も一面ケロイドで皮膚が引きつって痛くて眠れないとのこと。私は涙が止まりませんでした。また、「好きな人がいたけれど、男性の両親にお化けみたいな人は嫁にはふさわしくない。それにどんな子供が生まれるのか心配だから・・・。」と猛反対されたことも話してくださいました。この時のことは、私の脳裏から離れることはありません。

心の傷に触れた申し訳なさが、今でも心に深く残っています。でも、自分の身体を見せて戦争の悲惨さを話してくださつた先生に感謝しています。そして、唯一の被爆

国に生まれた私たちは、自分の目で見て、聞いたこと、感じたことを広く語り続けていくことが大切だと思います。

今、私がここで、こうして皆様にお話しできるのは、戦争から無事に復員してきた父がいたからこそです。私にも子供や孫がいます。命はずーっとつながっています。自分の命を絶ったり、他人の命を奪ったり、どんなことがあってもやってはいけません。一つしかない命、大切にしましょうね。

昨今、あちこちで災害や紛争が起きて、たくさんの人の命が奪われています。さて、皆さんには自然災害と戦争の違いは何だと思いますか？戦争は人の手で始まるということです。人の手で始まるということは、人の手で止めることもできる。又は「人の意志によって」なくすこともできる。だけど、なかなか止めることができないことは悲しいことです。

平和のために私たちができるることは、任せにするのではなく、私たち一人一人が友達や家族を大切にしたり、いじめや暴力をなくしたり、人を思いやる優しく温かい気持ちや責任ある行動で築き上げていくことにより、平和な社会、平和な世界への第一歩となるのではないでしょうか。

戦争ほど愚かなことはありません。人の手で、我々の生活を一瞬にして奪ってしまいます。

どうか皆さん、今日聞いたこと、感じたことをこれからもずっと心に持って、多くの人に伝えてもらいたいです。

私にとって平和とは、「当たり前のことが当たり前にできること」です。みんなにとっての平和とは、どんなことですか？今一度、考えてみましょう。

【参考とした資料】

富山県遺族会平和の語り部研修会研修資料2

日本遺族会広報室提供「自分史作成シート」を参考に作成しています。

○戦争体験を後世に伝えよう ~戦争体験を思い出して自分史を作りました~

中田 好子

名前 中田好子

生年月日 昭和 16 年 1 月 26 日 (84 歳)

戦没者との関係 遺児



1. 出身地と現在の居住地

東京都牛込区赤城下町 21 番地で生まれました。

現在は富山県魚津市木下新 87 番地 12 に住んでいます。

2. 戦争で亡くなった父のこと

父は大正 6 年 (1917) 2 月樺太豊原で生まれ

昭和 15 年 (1940) 当時、神奈川県横須賀にあった海軍士官学校を卒業、昭和 16 年 (1941) 12 月太平洋戦争が勃発し、すぐに召集され、駆逐艦巻波に上船、第二機関室長として、日本海、瀬戸内海で烈しい戦闘訓練を重ね、昭和 17 年 (1942) 9 月に呉軍港を出発し、太平洋の黒潮を蹴りたて、南方洋上へと出撃して行きました。

その頃の戦況は、日ごとに烈しさを増していく、昭和 18 年 (1943) 2 月 1 日、ソロモン諸島国ガダルカナル島近海で転進作戦中敵機と交戦となり、敵機の爆弾が第二機関室を直撃し、機関室にいた 29 名の尊い犠牲者がいました。父はそのうちの一人で 27 年の生涯でした。

爆撃を受けた駆逐艦巻波は、やられたのは第二機関室だけだったので、自力で何とか舞鶴港に戻り、修理し、再びソロモン海域へと向かいました。しかし、昭和 18 年（1943）11 月敵の魚雷艦にやられ、艦長と 213 名の兵士が艦と共に散られたのです。ここまでこのように詳しく分かったのは、駆逐艦巻波から奇跡的に生還された二人の方がおられ、そのうちのお一人である福井市の藤田吉野様からいろいろお聞きしたからです。

（1）藤田様のこと

当時、17 歳で甲板員であったため、巻波が沈没する寸前に海へ飛び込み奇跡的にガダルカナル島に巡り辿り着き、村人に助けられ 2 年半後の昭和 20 年（1945）終戦となり、郷里の福井へ帰還されたのです。

ご本人は生き還った者として、奮戦の末、散られた先輩諸氏 243 柱の慰靈祭を 45 年の歳月は流れたが行いたいので、と昭和 62 年（1987）春に私のところへ連絡があったのです。

そしてここに至るまで、ご遺族の所在探しのために、長い長い年月をかけて来られ、何とかほぼ 50 名の遺族の方々の所在を捜されたのです。また、その後に、ご遺族様に、自分の身の証しと追悼法要のことなどを申し述べ、ご理解を得るまで大変なご苦労をされていたのです。

また、福井に帰還された後に、現地ガダルカナル島へ節目の折々に足を運び、243 英霊の墓標を建てたり、命の恩人である村の人々にお礼に行っていらっしゃることもわかりました。

法要は昭和 62 年（1987）10 月に 45 回忌巻波合同慰靈祭が執り行われ、そのあと、50 回忌、60 回忌の法要を藤田様が執行者となって行っていただきました。

45 回忌に参加できなかった私に、藤田様から追悼のことばで述べられた中に、「巻

波が昭和 17 年 7 月に舞鶴で建造された後、戦場へ出航、数々の戦闘の末、撃沈に至るまでの 1 年 4 ヶ月の短命に終わる内容を書面に詳しく綴られ、そのものを参列者に渡し、話され、参列できなかつた私の方にも後日送られてきて、父の戦場での状況が分かつたのです。

(2) 私と藤田様の交流

45 回慰靈祭には所用と重なり参列できず失礼しました。その後、先に述べた書類が藤田様から送られてきました。45 回忌後、藤田様とは年賀状のやり取り、電話で話したりなど行っています。

平成 4 年（1992）7 月の 50 回忌法要には、2 歳下の妹（父の戦死から 15 日目、昭和 18 年 2 月 16 日生まれ）と二人で参列、藤田様とは初対面でした。この時に、亡き父が上官として、艦上で新兵に対する教えや振る舞いの数々には憧れを持っていたと聞かされ、そんな父であったのかと嬉しく思いました。

この時の法要参詣者は、戦没者 29 名の遺族 77 名と藤田様ご夫婦の 79 名でした。

3. 家族のこと

母と父の出会いは、慰問袋だったと母から聞きました。

昭和 17 年 9 月太平洋へと向かう前には舞鶴港、佐世保港へと 2 歳の私を連れて、母は会いに行ったことを聞いていますが、2 歳の時であり父の顔は覚えておりません。

私は 4 歳になり、東京大空襲、連日のように B29 爆撃機が飛来し、弾を投下、空は真っ赤になり、私は祖母、母、妹と自宅の庭に掘った防空壕に入って不安な日々を過ごしました。

昭和 20 年 2 月、烈しくなる戦争に祖父母の故郷である魚津に疎開してきました。疎開した後の 8 月には、富山市街地への大空襲があり、富山方面の空が真っ赤に染まり、思えば魚津の大火のような感じでありました。

また同時に魚津の上空をB29の飛行編隊が豪音を立てて飛んでいくのを防空壕の中で、恐ろしく、震えながらいたことを微かな記憶として残っています。4歳でした。魚津に来ても家がなく、もちろん父もいなく、親戚の家の一部屋を借りて生活し、幼な心に不安な毎日でした。

昭和20年8月15日終戦を迎えましたが、戦後は物が不足し、現在とは想像もつかない粗末な食生活でした。また、母は病弱で二人の子供を育てるのは困難と考え、同じく、中国、スマトラ、ジャワ島へと陸軍兵士として戦い、のち終戦後昭和21年に帰還してきた義父と再婚、ようやく家族も増え、少しずつ安定した暮らしができるようになりました。

義父から、戦地において食料が底をついたときに、カエルや蛇などを捕えて食べ生き長らえたことも聞きました。

私は、亡き父の戸籍に入っていたため「もらい子、もらい子」と苛めにあい、毎日、学校へ行くのが辛い思いもしました。また、高校1年生の時、「魚津大火」で家を焼失、私が43歳の時に母は他界、66歳の生涯でした。

夫は昭和13年生まれ（86歳）、小学校1年（当時国民学校）の時に終戦を迎えていますが、校庭で毎日、兵士として駆り出されなかつた父親たちが集められ、アメリカ兵を負かすんだとして手製の竹槍で「エイ、ヤー」と訓練の姿を教室から見ていたこと、授業中に警戒警報のサイレンが鳴ると、急いで学校近くの屋敷林の中へ走り、身を隠し、声を潜めていたこと、或いは、奉安殿、教育勅語のことなどが思い出されます。

さらには、日本は資源がない国であり、武器を作るにも金属が足りないために各家庭が持っている鍋、釜、鉄瓶など金属類のなんでも政府への供出施策が出され、持っていくときの非常に親たちの悲しそうな姿、或いは、弾丸除け、無事に帰れるように

とのお守り千人針づくりに母親たちが動き回り苦労している姿を今も目に映つていると夫は言い、折に触れ、私事のことも含めて、子供や孫たちに聞かせてきました。

今でも夫と実家、並びに中田の墓参りに年4回行き、また、毎月30日に住職に来てもらつて月命日参りを行つています。

4. 靖国神社、護国神社参拝について

小学6年生の時、初めて靖国神社を参拝しました。この時には亡き父の傍らに行つたようで、遺影で見る父の姿を思い浮かべ、大きく成長した私を見てもらったようで涙が止まらなかつたことが思い出として残っています。

その後、魚津市の遺族会でお世話するようになり、機会があれば靖国神社に参拝しています。また、富山県護国神社に年2回の清掃や行事にも参拝しています。

5. 地域の忠魂碑について

魚津市では、旧町村ごとにありますが、そもそも郷土から出征された戦没者を顕彰するため、自治会などの有志で建立されたもので荒廃しているものが多いのも事実であります。

6. ウクライナ侵攻等世界の紛争のニュースを見てどう思いますか？

テレビ、新聞等で毎日ウクライナ、イスラエルでの紛争のニュースを見るたび、82年前の自分と重ね、胸が痛みます。

7. 結びに

赤紙1枚でおめでとうございます、万歳、万歳で戦地へ行かされ、戦死すれば、戦死公報1枚届くだけ。太平洋戦争は多くの国民を犠牲にし、何のために、誰のために起こした戦争だったのか、戦後80年経っても、今だ、なるほどと理解できないのも本心です。

戦争とはそんなもの、そんな時代であった、仕方のないこと、と片付けられないと思ひます。

日本が経済的にも外交的にも大国として栄えているのも戦後復興のために全力で働き、頑張ってきた方々、そして現世代の方々の力は最大とは思いますが、戦争で戦い犠牲になった方々の魂があることを「かやの外」にやり風化させてはならないと思います。

また、戦争は過去のものとせず、教訓として、二度と起こさないことを肝に銘じていかなければならぬと思っています。

私は、両親より、夫は父親より長生きしています。家族とは、いざこざのない家庭、家族愛、そして金品より健康が一番をモットーに健康でいて「ボケ」ないようこの先、残り少ない人生とは思いますが努力していきたいと思います。